

令和3年度自己点検評価総評

令和3年度 神戸市立小磯記念美術館自己点検評価について

神戸市立小磯記念美術館条例第1条は、美術に関する資料を収集し、保管し、及び展示して教育的配慮の下に市民の利用に供し、その教養、調査研究等に資するために必要な事業を行うことを目的として、神戸市立小磯記念美術館を設置することを定めており、同3条で第1条に掲げる目的を達成するために次に掲げる事業を行うとし、

- (1) 美術品、美術に関する文献、複製等の資料(以下「美術館資料」という。)を収集し、保管し、及び展示すること。
- (2) 美術館資料に関する専門的かつ技術的な調査研究を行うこと。
- (3) 美術館資料に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書等を作成し、及び頒布すること。
- (4) 講演会、講習会、研究会等を主催し、及びその開催を援助すること。
- (5) 他の美術館、学校その他の関係機関と連絡し、及び協力すること。
- (6) 前各号に掲げるもののほか、教育委員会が必要と認める事業を定めている。

小磯記念美術館では、同条例第3条の事業について、(1)資料、(2)調査研究、(3)報告、(4)普及、(5)連携の5つを事業項目の柱として位置づけ、自己点検評価を実施する。

また、美術館事業を行うにあたり、美術館の経営についても考慮する必要があることから、(6)美術館の管理運営に関する事項についても、併せて自己点検評価を実施する。

令和3年度の神戸市立小磯記念美術館自己点検評価の「総評」は下記のとおりです。

【総評】

新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、活動の自粛を余儀なくされるなかで入館者数が減少した。その結果、トータル評価としては、事業項目6つのうち「資料」「連携」の2つがA、「調査研究」「報告」「普及」の3つがBと、「運営」がCとなった。

(1) 資料について「A」

収集に関しては、小磯良平の油彩4点、水彩1点、素描1点、銅版画1点の寄贈、小磯良平の油彩19点、素描26点、版画1点、薬用植物画182点、関口俊吾の油彩1点の寄託を受け、活用可能な資料が目覚ましく増加した。さらに作品のみならず、小磯作品のモデルが着用した衣装等の資料の受贈も受け、展示計画の幅が広がった。

例年通り、全館の害虫駆除を1回実施、生物環境調査を2回実施した。第2収蔵庫のカビを発見したが、消毒、断熱材の追加、隙間の補強、再発防止のため庫内の使用方法を見直しを行い適切に処理できた。

展示については、特別展2回、コレクション企画展示を2回(特別展と企画展示を各2回、いずれも同時開催で小磯良平作品選を計4回実施)行った。来館者アンケートの結果は、住友コレクション展で84%、三岸好太郎・節子展で89%の方が「良かった」を選択するなど、高い評価を得た。

(2) 調査研究について「B」

連携講座などは0件。他美術館での講演もコロナ禍で中止となった。大学での館長・学芸員・指導主事による講義および出張授業を4本実施した。また地元の業界機関誌への学芸員の作品解説寄稿が2回あった。

(3) 報告について「B」

例年どおり、特別展ごとの図録発行、年2回の美術館だより発行、年度末の年報の編集・公開を行った。

公式HPでは感染症拡大下、団体来館申込の書式をHPよりダウンロード出来るようにした。

また、公式フェイスブックは月平均11回の頻度で更新した。ページフォロワー数は3月末現在で約1,100人に増加。若い世代のファンを獲得するためにFacebookと並行した公式Twitterの開設準備に入った。

(4) 普及について「B」

10月～12月と3月の開館日の毎日曜日にギャラリーツアーもしくは解説会を、参加人数を制限して実施した。また、感染症流行のため美術講座は実施しなかったが、マンスリーコンサートは4月から2月までの11回、オンラインによる無観客動画の配信をおこなった。

教育普及イベントとして、

- ・夏休みワークショップに代え「夏休み来館者プレゼント」を行った。
- ・びじゅつかん大作戦は参加人数を10人に絞り、年間4回実施した。申し込みを神戸市イベントシステムを利用し、事務負担軽減と利便性の向上を図った。
- ・3月より「赤ちゃん家族の日」として子育て家庭に利用しやすい環境を提供した。
- ・子ども本の森の開館イベントにブースを出し、普及に努めるとともに当館の活動をPRした。

(5) 連携について「A」

所蔵作品の館外貸出(3件、9点)、画像の特別利用(写真掲載10件25点、原板使用5件10点、熟覧申請1件2点、撮影1件10点)を行い、小磯良平や神戸ゆかりの画家の芸術の普及に努めた。次年度以降も貸出の申請があれば積極的に対応したい。

また、学校園団体受け入れ(26校園・1,618人)は感染症の影響を受けて、例年より低調であった。出張授業(66回・2,113人)は、例年より多くなった。校外学習の実施が難しい中ではあるが、子供たちが美術館や芸術作品に触れる機会を提供できた。

(6) 管理運営事項について「C」

R3年度は4月26日から5月11日まで、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言への対応のため、臨時休館したが、5月12日以降は十分な感染対策を講じたうえで、予定通りの日程で展覧会を実施した。しかし、5月12日以降も、イベント中止や外出自粛等の要請は続いたため、入館者数は伸び悩んだ。

特別展の入館者数は、「住友コレクション展」で回復の兆しが見えたが、続く「貝殻旅行展」では新たなウイルス株の広がりにより伸びなやみ、目標としていた収支均衡には及ばなかった。

コロナ関連の財源確保のための執行留保が要請され、事業費を抑えた執行に努めた一方で、入館者数の減により収入も減る結果となった。

上述のような厳しい環境ではあるが、引き続き小磯記念美術館の認知度アップを含め魅力ある美術館運営に努めていきたい。

以上の自己点検評価において、担当者自らも問題点・課題を意識することで、次年度に向けての改善点をスパイラルアップできるようPDCAを実施していく。